

## 國際會議情報

# 「パリ天台學國際會議」に参加して

阿 純 章  
林 慶 仁

### はじめに

平成7（1995）年10月9日から12日までの日程で、パリ天台學國際會議（Conférence Tendäi de Paris, Paris Tendai Conference）と稱される天台學始めての國際會議が實現した。この會の主催は、フランスの文部省直轄の高等教育機關であるコレージュ・ド・フランスと、日本の大學院に相當するフランス國立高等研究院の第5部門（宗教研究部門）であり、主催責任者はベルナル・フランク氏（コレージュ・ド・フランス教授）、事務局長はジャン＝ノエル・ロベール氏（フランス國立高等研究院教授）、日本側團長は大久保良順氏（天台宗勸學院院長，妙法院門跡），日本側事務局は福井文雅，利根川浩行，坂本廣博の三氏であった。会場には、コレージュ・ド・フランスの付屬會館であるフォンダシオン・ユゴーが使用され、参加者は29名であった。豫定された會議日程と参加者は以下の通りである。（敬稱は、できるだけ「～氏」に統一した）

### 10月9日（月）

午後6時 参加者登録，歡迎レセプション（コレージュ・ド・フランス極東研究所 日本學高等研究所）。ベルナル・フランク（コレージュ・ド・フランス教授）歡迎の挨拶に對して，大久保良順（天台學會會長）答禮の辭

### 10月10日（火）

午前9時30分 開會の辭 ベルナル・フランク（コレージュ・ド・フラン

東洋の思想と宗教 第十三號

ス教授)

代表式辭 大久保良順(天台學會會長)

// ジャン＝ノエル・ロベール(國立高等研究院教授)

午前10時45分 コーヒーブレーク

午前11時 台密と圖像學 議長 三崎良周

午後1時 ビュッフェ

午後2時 天台宗の儀式と聲明 議長 天納傳中

午後3時 天台宗の論義 議長 ポール・グローナー

午後4時 コーヒーブレーク

午後4時15分 天台教學の現今の問題點 議長 村中祐生

午後6時 終了

10月11日(水)

午前9時30分 外國語及び現代日本語による天台宗經典の翻譯(1)

議長 池田魯參

午前11時 コーヒーブレーク

午前11時15分 外國語及び現代日本語による天台宗經典の翻譯(2)

議長 ポール・スワンソン

午後1時 ビュッフェ

午後2時 天台學に於ける將來像(1) 議長 ジャン＝ノエル・

ロベール

午後4時 コーヒーブレーク

午後4時15分 天台學に於ける將來像(2) 議長 大久保良順

午後5時45分 閉會の辭 福井文雅

午後6時15分 チャーターバスで下記レストランに移動

午後7時 天台學會主催 答禮宴(ジャンゼリゼ通り旁のレストラン  
「美紀」)

10月12日(木)

午前7時頃 TGV エクスカーションでフランス北西部海岸にある聖地モ  
ン・サン・ミッシェル清遊。パリに歸ってから一同で夕食

「パリ天台學國際會議」に参加して

10月13日（金）

午後5時15分 ギメ東洋美術館 日本佛像コレクション（ベルナール・フラン  
ク案内）

参加者（ABC順，50音順）

ルシア・ドルチェ（ライデン大學），ベルナール・フランク，ポール・グロー  
ナー（ヴァージニア大學），クオ・リーイン（フランス國立極東研究所），リン  
ダ・ペンカワー（ピッツバーグ大學），ジャン＝ノエル・ロペール，同夫人，  
ダニエル・スティープソン（カンザス大學），ポール・スワンソン（南山大  
學），リー・ヨンジャ（ソウル大學），

天納傳中（叡山學院教授），池田魯參（駒澤大教授），大久保良峻（早大助教  
教授），大久保良順，阿純章（早大院），落合俊典（華頂短大教授），折茂洋子（コ  
レージュ・ド・フランス），坂本廣博（叡山學院教授），白土わか（大谷大名譽  
教授），武覺超（叡山學院教授），利根川浩行（大正大講師），成瀬隆純（早大  
講師），花野充道（早大院卒），林慶仁（早大助手），福井文雅（早大教授），中  
野千恵美（ルーブル美術館研修生），松景崇誓（妙法院隨身），三崎良周（早大  
名誉教授），村中祐生（大正大教授），山田利明（東洋大助教授），吉田敏行  
（早大院），他一名（武氏隨身）

以上

この時期のフランスの氣候は，どの旅行ガイドブックを見ても，肌寒く，セ  
ーター，カーディガン必要，と書いてあるが，實際来てみると，異常氣象のせ  
いか，特に日中はシャツ1枚でも汗ばむ暖かさて，フランス紳士の流儀に反す  
るかも知れぬが，會議中は上着を脱いで腕まくりをしなければ我慢ならないほ  
どであった。

先ず，この國際會議が開催されるまでの経緯を述べれば，立案者はロペール  
氏であり，平成3年（1991）秋，京都・比叡山で開催された天台學會年次大會  
に出席した折りに，そのシンポジウムに感銘を受け，國際的な天台學會の開催  
を思い付き，福井氏に相談し，協力の快諾を得られ，その懇親會の席上，今回  
の案が披露された。その後，両氏の間で種々下相談があり，大正大學の天台學

研究室とその他の關係諸機關とも話し合いが進んだ結果、平成5年(1993)10月29日(金)、大正大學で行われた天台學會で、パリの天台學國際學會の開催が提案されて、正式に今回の會議が實現することになった。

次に、この會議の趣旨についてみると、「天台學の過去と現在—未來の展望」というのがテーマであった。また、本會議で代表式辭を述べたロベール氏の言葉によれば、ヨーロッパで天台學をする學者はまれで、「變わり者」が行う研究であるように見られ、ロベール氏自身今まで孤立してこの思想研究に取り組んで來たといい、この國際會議によって、各國の研究者間の相互理解と情報交換の場が設けられることを切に願っておられた。

更に國際的規模で進行中の『摩訶止觀』翻譯の現況を話し合うことも、今回の會議の目的の一つであった。

したがって、この會議は、個々の研究發表の場ではなく、議長が1つのテーマについて問題を提起し、それについて日本、フランス、アメリカ、韓國等の各國の參加者全員が發言するというシンポジウムの形式で執り行われた。

使用言語はすべて日本語で行われた。

本來、一宗門の立場を越えて、「天台宗學」ばかりでなく幅廣く「天台學」の諸問題を討論し合うという趣旨が本會議の根底にあった。その結果、日本側からも天台宗の學僧ばかりでなく、駒澤大學から池田魯參氏、大谷大學から白土わか氏が招待されたことは有意義であった。さらには、國籍、宗派等を問わず、正式招待者以外も區別することなくオブザーバーとして出席することを歓迎するというフランス側主催者の意向があり、そのようなところにも宗派意識にとられない國際會議の特色が見受けられた。

ロベール氏は代表式辭の中で、フランスの佛教學における天台學の位置付けについて興味深いことを述べておられた。つまり、フランスでは、佛教という宗教を文化的、歴史的な見地から研究することが当たり前のことであるから、佛教思想の中で天台學のような専門的な立場から研究を行うのは風当たりが強く、今回の會議の開催について異議を唱える學者もいたというのである。もちろん、ロベール氏自身も文化的、歴史的立場から天台學を研究しているのであるが、それでもなお、佛教の中の特に一宗派についての研究ということが、フ

## 「パリ天台學國際會議」に参加して

ランスの學界では奇異に感ぜられたらしい。このようなことは、宗門のための研究が盛んな日本ではあまり問題にならないし、意識すらされないことかもしれない。我々にとっては新鮮なヨーロッパの佛教學の現況が聞けたのも國際會議ならでのことであった。

第1日目の夜、我々は、ファッショナブルなパリ大學の學生で賑わうカルディナル・ルモアヌ通りにある、コレージュ・ド・フランスの日本學高等研究所の1室でフランス側関係者の方々から温かい歓迎を受けた。日本からパリまでの移動の疲れが蓄積していた我々にとって、事務局の方々の氣配りと本場の冷えたシャンパンとは、何よりの慰めとなったのみか、翌日から學會があるという意識を十分に高めることができた。

## 内容報告

では次に各セッションにおける議論の内容と問題点を簡単にまとめてみたい。多少の私見を含むのは許していただくとして、できるだけ客觀的にセッションの次第に従って記してみたい。今回は忠實な議事記録作成に耐え得るようにと、メモを手元に置きつつ記述したのであるが、もし發言者の意圖と食い違うような表現があるとすれば、それはすべて林・阿兩筆者の責任であることを明記しておきたい。

繪畫のような町並みの中に、第2日目の会場フォンダシオン・ユゴーは歴史と共に建っていた。季節がらワイン色に紅葉した蔦葛の葉が、2筋建物を斜めに這っていた。議事に従い、最初にフランク氏より開會の辭があったが、そこではコレージュ・ド・フランスについての説明がなされた。400年以上の歴史を持ち、數多の學者を輩出していること、それに伴って佛教學の分野でもシルヴァン・レヴィを始めとする優れた學者が多數教授されたこと、現在の講義は無料で教授の興味ある分野を一方的に講義し、學生は聴くも聴かないも自由であること、その講義内容は學界で現在問題になっている點を教えており、初學者向けの講義とは一線を畫すものであること、などを説明された。福井文雅『歐米の東洋學と比較論』（隆文館）に據れば、學士院が授業料無しで教授をしているようなものであるらしい。

そして大久保良順氏とロベール氏の式辭の後、コーヒーブレイクの時間を割いて、自己紹介の時間とされたが、参加の外国人皆が皆流暢な日本語を駆使されるのには驚いた。我々の記憶の底に沈んでいた諺も、時々日本人以外の方が思い起こさせてもくれた。

この學會は、ロベール氏が總司會となり、議長がそれぞれのセッションで選ばれ問題を提起し、それについて参加者が自由に討議するというシンポジウムの形式が取られた。

## 1. 「台密と圖像學」

議長 三崎良周

自己紹介が長引き、時間がずれ込んでの開始であった。三崎氏より圖像學に関連することだけでなく、密教研究全體における今後の重要な問題点を提示され、今回の會議全體の中でも特に密度の濃いものであった。

はじめに三崎氏は、密教研究において要となる問題点をいくつか論じた。一つには、信仰の爲だけに行われる狭い天台宗學から脱却して、幅広い天台教學思想の立場から研究がなされなくてはならないことを強調された。次に天台學の研究者は数多くいるとはいえ、研究分野別に見るとその人数は限られ、天台の思想の全てを網羅しているとはいえない、と現状を指摘した。

更に傳教大師最澄の密教の研究内容について強く反省を促す辨があった。即ち最澄が入唐以前に『大日經』を讀んでいたとするのは、既に日本に『大日經』があったからという理由のみから判斷するのは不當である、と言うのである。その話題を契機として最澄が『華嚴五教章』を讀んだことと、密教との出会いは偶然であると説明された。更に胎金蘇三部で台密が完成したこと、中國では顯教と密教の分類ができるのは北宋の時代であるのに日本ではそれ以前であること、小野玄妙氏が圓珍の『五部心觀』を大正藏に入れたことは畫期的であったこと、『阿婆縛抄』が重要であること、『一字佛頂輪王經』『陀羅尼集經』とが蘇悉地には不可缺であること、等々、台密の問題点を次々に指摘された。

更には、曼荼羅の圖を配付され、具體的な手印の説明をされながら佛像の説明をされた。特に密教研究においては、教理的よりも美術史的に解釋する方が學問の進展がある場合があり、圖像學と密教教理を結び付けた研究の必要性を

訴えられた。

フリートーキングの時間に入り、更に三崎氏により『蘇悉地經』の問題が取り上げられ、不空・恵果の傳記に蘇悉地を實行した記述のあること、根本眞言が今なお不明であることなどが指摘された。

更にここで信仰と研究のありかたについての話し合いも、参加者の間で起こった。研究の根底に信仰心があるべきだという意見や、あるいは純粋な文獻的研究から信仰心は自然と生まれてくるものだ、という意見も出された。天台の信仰を持たない人、例えば外國のクリスチャンで天台の研究者等に對しては意味のない議論に思えたのだが、今後の宿題であろう。

## 2. 「天台宗の儀式と聲明」

議長 天納傳中

次のセッションは、台密聲明の第一人者、天納氏の獨壇場であつた。最初に天台聲明の分類を説明された。天台の聲明は「顯教立」「密教立」「その他（兩者混在したもの）」があり、特に「その他」の中には、大原の來迎院等特定の寺院でしか行われない悔過（ケカ）法要のあること、過去にフランスで聲明を録音した實績のあることを話された。その公演の折り、聴衆から、「このような音楽を普通に宗教活動をしている僧侶にできるはずがない。あなたは専門のミュージシャンであろう」と疑われた事、入場の時は拍手をされたが、出る時は宗教儀禮だと理解されて、唯息を飲んだまま見送られた事、キリスト教會も50年前まではラテン語の4線譜が残っており、聲明がその時のグレゴリア音楽に似ていると言われた事等を話され、きわめて興味深いことであつた。

實は、ソルボジヌの禮拜堂で天台聲明が嚴修される豫定であつたが、式衆が足りないので實現しなかつた。しかし、その代わりに學會會場で、天納氏御自身が天台聲明を唄われた。そこで、そこにいた我々28名のみが、三千院門跡が宮中法要の時のみに唱えるという世にも珍しい「法華懺法」を聴くことができた。それは天台宗の儀式で普段聞き慣れたものとはかけ離れた、別世界のものの如きであつた。

それに續く質疑應答では、中國語の四聲との關係、表記の仕方などの質問があつた。

### 3. 「天台宗の論義」

議長 ポール・グローナー

第3のセッションは、ある意味で一番白熱していた。参加者が最も積極的に有意義な発言をした。折しも折り、日本天台宗の總本山比叡山延暦寺において、4年に1度の廣學堅義が終わったばかりでもあった。グローナー氏から(1)論義が學問と関係があるか、(2)論義をどのように位置づけたらよいか、(3)論義内容のジャンルの分析をすべきである、といった問題提起的な発言があった。

次に活発な議論が始まった。そのすべてを取り上げるわけにはいかないが、主な発言だけを取り上げていこう。武氏が比叡山で行われている堅義は試験である旨を、白土氏は、インドでは古くから upadeśa (ウパデーシャ) という古くから論義に相當するものがあり、中國の『高僧傳』(吉藏・慧遠)にも論義の記述があること、そして法相の義議には因明と『成唯識論』が入ること等論義の流れを説明された。その次に福井氏は、「論義」というのは現代的な意味での議論ではなくて(論義と論議とは違う)、1連の儀式の一構成要素であることは敦煌文書の中に明證があり、現代でも佛教儀式の一環であって、教義の議論の内容そのものは、さほど重要視されないことを述べられた。しかし福井氏の話がよく聞き取れなかった爲でもあろうか、「論義は儀式」であるかどうかについて、改めて坂本氏、池田氏、花野氏、大久保良峻氏等より活発な意見が出された。

その次に、上野の寛永寺で何度となく論義を経験された大久保良順會長が、論義の決着は高六兩祖(智顗・湛然)の著述に是非を仰ぐのが論義儀式の常例であるので、結論はその域を出ないこと、また理で質問するか事で質問するかという設定を行って問答することがあること等を話された。以上盛んな議論があったが、決められた時間が来たために話は終了となった。

最後にこの討論で興味ある御指摘があったのでそれに觸れておきたい。インドにおいては、「正しい認識の根據」としての論證式とそれを用いた實際の議論が非常に盛んになった時期があって、後々まで佛教内外に壓倒的な影響を与えていた。更にインドの「正しい認識根據」の議論を受け繼いだチベットでも、益々論議とそれをめぐる論争が盛んになる。いやそれどころか、チベットではまさに天台の論義と同じような形態が現在でも残されている。にも拘らず、何



故日本では——勿論天台宗では生きた文化財として論義が綿々と伝えられてはいるし、そして日本に伝えられた因明學は法稱流のものでなく『因明入正理論』系の特定のものであった事實はあるが（武邑尙邦『因明學』法藏館S61）——論義、論争の仕方、正しい認識を得るための議論が主流とならなかったのか疑問であった。しかし大久保會長が、ある著作に、ある時の座主が「因明は相手を負かすものであるからやるべきでない」という旨を出したこと、そして良源や恵心僧都も同様な立場を立てていたという記述のあることを指摘された。筆者（林）にはその時、この邊に日本で因明が忘れられていった根本原因の1つがあるように感じられた。

#### 4. 「天台教學の現今の問題點」

議長 村中祐生

2日目最後のセッションで村中氏から、天台教學という立場に捕われず佛教者一般という立場からの問題提起があった。瞑想による心の癒しと、傳教大師の忘己利他という言葉を福祉という言葉に置き換えることを話された。このセッションにおいても活発な議論が繰り広げされた。特にスワンソン氏の本覺思想一佛性論、天台と禪宗との関係、天台から見た他の宗教との関係という現在の天台の抱える問題の指摘は最も的を得たものであるものと思えた。また花野氏からは教判の件、大乘非佛説の件などが問題點として指摘された。

このセッションの討議の中で三崎氏が、「自分も昔のことをやっているという後ろめたさは持っている」という獨白のような發言は我々の心に深く染みた。更に三崎氏は訓詁註釋だけではだめであり、この社會のために天台の教えがもたらす意味を問うことの必要性を指摘しながらも、ただし、過去の歴史は別個に考えなければならないことであり、天台の現代的意味を問う問題と安易に混同させることは避けるべきである旨を述べられた。

#### 5. 「外國語及び現代日本語による天台宗經典の翻譯」(1)

議長 池田魯參

2日目ですでに慣れたためか、3日目の議事も順調に滑り出した。この日の参加者は26名であった。最初池田氏は過去の御自身の翻譯の書名をすべて挙げら

れた後、氏自身による『摩訶止観』の日本語譯の全譯がそろそろ出版される旨を話された。それに關連して、現在『摩訶止観』がフランス語、英語、ロシア語、イタリア語で出版される企畫が進行中であることが公表された。またその翻譯はロベール氏、スワンソン氏が擔當されること、またスティーブソン氏には既に部分的な英譯のあること、またリー氏からは、韓國語に翻譯された天台關係の著作名も公表された。

さて池田氏による翻譯に關する問題點は先生のまとめをそのまま拜借すれば次の如くである。(1)誰に向かってどの程度の翻譯をするか。即空・即假・即中といった重要な單語を翻譯していいのかどうか、また「一念三千」などは翻譯できるかどうか、古代使用されていた差別用語をどのように翻譯していいか。(2)文章の段落をどうするか。(3)『摩訶止観』特有の、1つの言葉では終わらせず、重なるように説明されている文章をどうするか。(4)『中論』『大智度論』『涅槃經』などで、三論宗と違った読み方をしている場合どうするか。以上の4點が指摘された。

これに對して特に差別用語の問題が特に参加者の興味をそそった。今回の日本語譯で池田氏が女人(にょにん)という語に對して「異性」という語で譯されたことなどが話題となった。

## 6. 「外國語及び現代日本語による天台宗經典の翻譯」(2)

議長 ポール・スワンソン  
コーヒブレイクを挟んだ次のセッションで、更に翻譯の問題が取り上げられた。スワンソン氏より指摘された翻譯上の問題點は次の如くである。(1)漢文を西洋語へ翻譯する上で問題がある。即空などのテクニカル・タームは日本語譯の場合のようにそのまま残すことはできない。(2)どのレベルで翻譯するか。直譯か意譯か。(3)どのテキストを譯したらよいか。『摩訶止観』が終わった後は他の三大部へ移ったらよいか、『維摩經』の注釋などがよいか。(4)湛然の注釋など、傳統的注釋に頼るべきかどうか。以上の4點が出された。ここでも議論が活發であった。

特に主だった意見のみ挙げると、池田氏は、文脈のわからない箇所のみ湛然

の註を見て、それ以外は文意から解釋されたことを話された。福井氏は、虚字の譯の重要性、時制をどう捉えるかという漢文翻譯上の問題點を挙げられた。更に漢文でもどのテキストを定本にするか、どの版ではだめか、敦煌文書はどうかなどの議論もあった。フランク氏は、漢文以外の言語の場合なら、註を讀みながら正しいエディションを出すのが最初で、その次に翻譯が始まるべきだ、という最も適切な意見を出された。また坂本氏からは、新しい大正藏が出来た時のエピソードなども聞いた。

## 7. 「天台學に於ける將來像」(1)

議長 ジョン＝ノエル・ロベール

このセッションでは、前の時間の議論を受け継ぐ形で、最初に差別用語の扱いが議論された。池田氏が差別戒名の件、白土氏がマヌ法典の時代からある業の件を指摘された。フランク氏は、すべての人を敬愛するのは當然のことであるが、差別用語を翻譯をする場合、フランス語からの視點が必要である、今私達が頑張らなくてはいけない、と熱辨された。福井氏が、これは文化の問題ではなく、社會問題である。女人を「異性」と譯することなどは逆差別だ、と話され激しい議論が戦わされた。リー氏は男女の戒律が違うのは方便であると解釋された。

このセッションの後半は違う話題、本來話されるべき天台學の將來について話された。ここでスワンソン氏が作成された「Glossary of T'ien-t'ai Terms」という天台特有の語彙集が發表された。將來はインターネットに乗せたいという意向もお持ちのようであった。また大久保會長から論題の目録作成の件も話された。

次に議長のロベール氏が、歐米の天台學者が認められる爲にはどの分野を研究したらよいか、という質問のような問題提起があった。村中氏は『首楞嚴經』の重要性を説かれた。また福井氏は今の佛教研究をするなら明代以降の佛教研究が必要であり、儒・佛・道の三教一致を考えなくてはならない旨話された。池田氏は、鎌田茂雄氏説と斷わりながら、隋・唐の佛教は日本の奈良佛教に残り、宋代の佛教は日本の禪宗に残り、明代の佛教は黄檗宗に残っている、と言う説を披露された。三崎氏は天台の葬式には禪宗の要素が入っていることを話

された。また天納氏は懺悔の點から興味深い話をされた。

最後にロベール氏は、「智顗、慧思の思想をみるべきである。また、佛教學と中國學を分けない立場に立つべきであり、その觀點から見れば、六朝時代の思想を研究すべきである。そして、そのうえで必要なことは、佛教用語を當時の言葉として認識することであり、經典に用いられる言葉を中國の文化的背景を念頭に置きながら読み取っていくことが重要である」と指摘された。その發表について「佛教學と中國學とを分けない両方から研究すると言うその方法は、フランスの佛教學の傳統的方法である」と言う福井氏のコメントがあった。

## 8. 「天台學に於ける將來像」(2)

議長 大久保長順

さてこの學會の最後のセッションとなった。ここで大久保會長が1時間にも及ぶ講演をされて、普段では聴くことができない話を伺った。天台宗の抱える個々の問題を話される前に、現在天台宗として教學の面でどのような活動をしているかを話された。即ち天台の研究所を作って研究者を作りたいという意向と、天台學辭典を作ろうという意向から、宗典編纂所が寄付を募ってできた經緯や、天台宗全書に續き、續天台宗全書(第二期)も今後刊行豫定であることなどをお話になった。

さて大久保會長の講演の内容であるが、會長の分類を参照して要點を見ていきたい。(1)觀心が問題である、自分は1冊の本をじっくり読みたい、澤山読んで澤山作っても本當はわからないのではないか、學者が草木成佛のことはわかっても、自分の成佛のことはわからないのではないか。似て非なる研究でなく、似て眞なる天台學をしてほしい。(2)日本天台は傳教大師の一乘思想をすべきである、一乘思想は世界平和のためである。そのためには圓戒思想をもっと研究する必要がある、受戒成佛や戒體の思想は勿論のこと、懺悔・佛性などについても考慮しなければならない。(3)圓密一致に関する研究が必要である。その觀點から圓仁・皇覺・尊海・惠尋等の立場があり、密教の重視、法華の重視、止觀を法華より優位に置く考え、戒と灌頂を結び付ける考えなどが天台思想の歴史の流れの中にある。

以上の3點を話されたが、最後の灌頂の話は參加者の興味をそそり、質問を

受けた大久保会長は、民衆のために玄旨歸命壇灌頂や五重相傳灌頂のあること、また天皇を加持する場合の祕密の灌頂法があることなど、普段お話にならないことまでも話された。

以上ですべてのセッションが終わり閉會の辭になる豫定であったが、その前に、前日割愛せざるを得なかった天納氏の聲明の續きを聴かせて頂いた。その折りに、天納氏から次代に聲明を伝えるため、お弟子さんを取って育成されていることを聞き、安心したりもした。

最後は今學會の共催者である福井氏が閉會の辭を述べられた。ここではっきりと、この學會は天台宗に限定されることなく、天台學に興味を持つ者であれば、誰でも自由に参加できる趣旨のもとで始まった旨を再度明言された。また5人もの「天台宗勸學」が集合したのも珍しい學會であった、との感想も付け加えられた。

以上をもって2日間にわたる最初の天台學國際會議がすべて終了した。

學會後、シャンゼリゼ通りに接したピエール・シャロン通りにある「レストラン美紀」で、天台宗からの補助で、夕食を参加者全員が頂いた。外國で食しているとは思えぬ程の日本料理の数々と、主人ご夫妻の細かい心配りとにもてなされ、憧れの都パリに在ることを暫し忘れる程楽しい時間を過ごすことができた。(以下の日程は、筆者兩者のうち林は歸國し阿のみの参加である)

會議は11日をもって終了したが、12日には、西北部フランスの景勝の地として有名なモン・サン・ミッシェルへの遊覽小旅行があった。

13日晝頃に日本人参加者の大半は歸國したが、その日の午後ギメ東洋美術館において、日本の佛像コレクションを見學する機會が設けられたことも有意義であった。それには會議への歐米人出席者の多くが参加したのみならず、その御家族も加わって、より一層の親睦が深められた。

ギメ東洋美術館では、ベルナール・フランク氏が詳しく案内して下さり、日本でも珍しい大變貴重な佛像が次々に紹介され、まさに驚嘆の連続であった。その中には、御自身が高嶋屋で五千圓で手に入れることのできた佛像もあることで、ちょっとユーモラスな佛像の入手のいきさつなどもお話しして下さった。見學の最後に、フランク氏は、天台は他宗よりも教理の領域が廣いため

に、佛像を分類する際に、天台のものであるかどうかを見極めることは非常に困難であり、今後の研究の進展に期待をかけていると言われた。今回の會議で三崎氏が、教理と圖像學を結び付けた研究の必要性を指摘したこととともに、我々若手研究者に大きな課題が託されたと強く認識した。

なお、ギメ東洋美術館の見學の前に、フランス學士院において、その五部門中の一つである「碑文・文藝アカデミー」所屬のフランク氏の講演が行われた。その折りには、同氏による招待状がなければ入れないところを、福井氏のご配慮があって、筆者（阿）のようなものまでも聴講者として入場することができた。感謝と感激の言葉盡きぬ心境であった。その気持ち覺めやらぬまま、學士院の嚴かな建造物、その内部のいたるところにある過去の著名な學者の胸像や肖像畫を見て、學問に對して絶大の權威を有するフランスに改めて感嘆した。

以上のように、今回の會議は、さまざまな點で有意義であり、心に残ることが多かった。學士院から地下鐵サン・ミッシェル驛まで、空港へ向かう福井先生を送って、セーヌ川沿いの道を吉田敏行君などと一緒に歩いたことなども忘れ得ぬ思い出となるであろう。

## 最後に

さて、今回の會議を振り返ってみると、全體として成功を収めたといつてよい。また天台學研究における問題點を浮き彫りにするような重要な指摘が多く出され、參加者各人にとって、今後の研究を推し進めるうえでの節目になったことは間違いないであろう。

ただ、少しく残念に思ったことは、せっかく天台學の先端にいる學者たちが一所に集まり、意見を交換する機會が設けられたのに、獨善的に自分の知識や信條を述べることに貴重な時間が費やされる場合もあったことが、若干ではあったが見受けられ、それによって議論の流れが滞り、場合によっては、話し合うべき焦點がいささかばやけてしまうことがあったことである。

また、天台教學の中で問題とすべきいくつかの思想を話し合う際に（特に佛教の差別的な思想を問題とする際に）、それを天台教學のどの邊に位置付けるか

という觀點から意見が出されることがいくつかあったが、時代時代の僧侶がその思想をどう捉えたか、または、何故にそれを問題にしたのか、という視點から、議論がもう少し掘り下げられればよかったのではないかという印象も受けた。

とはいえ、全體的には「天台學」という學問の見地から話し合いを進め、天台宗という一宗の爲だけの會議にはならぬようにする努力が折りに觸れて感ぜられ、またその成果も多大なものであらだと思われた。

コレージュ・ド・フランス所屬會館という、普段は決して使用することのできない會場をお貸しただけしたのは、全くフランク先生のお骨折りに據るものであったということを聞かされた。1日目のホテルに歸る途中のことであったが、たまたまフランクご夫妻と地下鐵をご一緒させていただいた。その折り新參者の筆者（林）が翌日の會場の場所を不明であることを知るや、フランク教授は車中丁寧に道順をお教え頂いたのみか、とても説明しきれないと判斷するや「先生、少し下りて頂けますか」と筆者を誘い、驛ホームのベンチに腰をかけ、地圖にボールペンで印を付けながらお教え頂き、共に1本遅れた電車に再度乗る、という出来事があった。自分の樂天家振りは別として、教授のまさに博愛主義者の人格の斷片を窺い得る、典型的な出来事として記しておきたい。

またこの2日間に涉るセッションで最も活躍されたのは、ロベール氏であった。各セッションで議長が選ばれても、常に側に付いて、議長の議事が滞りなく運ぶように各發言者の要點をまとめたり、議事のアシストをしたりした。ロベール氏本人は、「歐米の天台學者は變わり者と思われしかも孤獨である。その天台學者が集まって議論できることは、大變な喜びである」と疲労の表情の中でも力強く話していらっやった。

勿論、資料をすべて揃えて頂いたロベール令夫人や、ビュッフェや各コーヒブレイクで給仕をして頂いた、コレージュ・ド・フランスにいるフランス人のシェフ、細かい手配をして頂いたバリ在住の日本人スタッフの皆様の御援助も忘れることはできない。我々外國人を文字通り暖かく迎えて頂いた関係者の皆様のお心は、プライベートで訪れたモンパルナスのレストラン COUPOLE の山のように盛られた牡蛎のあまい味と、モンマルトルのバー LAPIN AGILE

の片隅で目をつむり、明るい悲哀を湛えたシャンソンを熱唱する婦人の横顔と共に、快いパリの印象として胸に刻みこまれている。

この學會には第1回という序数が付けられていない。次回開催そのものの豫定が決定していないからだと言う。私見を虚飾なく述べても、今回の學會は成功であった。各國の天台學關係者が一同に會したという點だけ取ってみても意義は大であったことは間違いない。どのような形であれ、開催國がどこの國に決定されずとも、遠くない將來第2回目の同趣旨の學會が開催されるであろう豫感は、學會終了時に確かに多くの參加者の胸に萌芽したであろうと實感し、筆者兩名もその刹那、確かに同じ想いであると自己認識した記憶が今でも残っている。

「會議報告」という本稿の性格上、本會議實現までに、長年にわたって多大の努力を拂われた日本側事務局の方々、特に中心となって動かれた福井文雅、利根川浩行、坂本廣博の三氏について、以上の文章では觸れることが少なかったが、參加者は全員、三氏の蔭の獻身的な奉仕を忘れるものではない。宗派、人種、大學等の枠を越えたからこそ、今回の成功があったのではなかろうか。